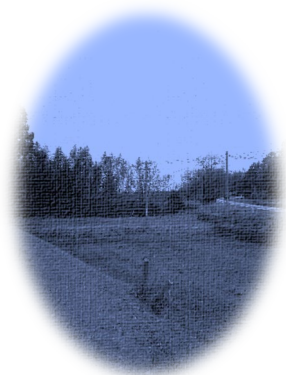


友よ 第四回

赤神 諒



第四章 川と麦

——天正七年（一五七九年）四月、讃岐国・羽床



信親のぶちかは愛用の片鎌槍を杖代わりにして、異郷の川へ身を乗り出した。明るい苔色の流れは、るいが締めていた帯の色に似ている。

未知の川に出会うと、信親は必ず地元の者を探して、まず川の名を尋ねた。中讃岐なかさぬきを流れるこの川は「綾川あやかわ」と呼ぶらしい。

羽床城はゆかじょうを望む長宗我部軍の本陣は、綾川を背に敷かれた。

慎重居士しんちゆうこじの元親と忠兵衛主従は、確実な勝機を作り上げてから、兵を動かす。敵に十倍する兵力で、今回も勝ち目は定まっていた。

友よ 第4回

「新目たちの戦いが西讃の地と民を救ったわけだな、彦十郎」

西讃が再び戦場とならなかったのは、あの玉砕戦があったからだ。

勝ち戦とはいえ、慮外りよがいに多くの将兵が死傷した長宗我部家中では厭戦気分えんせんが強くなった。元親も、これ以上の犠牲を出せば四国平定に差支えが出ると懸念けねんした。他方、西讃諸豪は、多大な犠牲を払いながらも新目勢を殲滅せんめつした侵略者に対し、恐れを抱いた。

結果として、西讃岐で最有力の豪族であった香川之景かがわゆきかげは、敵対から和平へと転じ、信親の弟親和ちかかずを香川家の婿養子として迎え入れ、長宗我部の軍門に降くだった。香川家が味方すれば、後は造作ぞうさくもない。元親は一兵も動かさず、西讃の諸豪族を傘下に収めた。

「名も無き将ながら、見上げた武人にござった」

己の名を残すためではない。ただの意地でもない。確実な敗北のみが待つ戦で、新目たちはあの激闘と壮絶なる死をもって、故郷の安寧を勝ち得たとも言える。

かくて岡豊城おかこうじょうを発した長宗我部軍は、各地から軍勢を集めつつ北上し、総勢一万二千の大軍で、中讃岐の攻略に取りかかった。

その前に立ちはだかったのは、中讃で最強の将と名高い羽床資載すけとじ・資吉父子であった。羽床勢はたかだか一千だが、二人の武勇は評判に違たがわず、土佐勢は意外な苦戦を強いられた。中でも若き資吉は、福留ふくどめ隼人はやと並みの巨漢で、牛のように大きな馬に乗っていた。恐るべき怪力で金砕棒かなさいぼうを振り回すたび、辺りに血煙が上がる。それでも長宗我部軍

友よ 第4回

は数に任せて、七度の激戦の末、高篠たかしの險よに拠る羽床勢をようやく撃破した。

さらに進撃して今、羽床城の北から西にかけて布陣している。

「父上も、藤目城攻めと同じ轍てつは決して踏まれぬはずだ」

「されど敵は、なお意気軒昂い きんこう。言葉のみでは服しますまい」

隣で彦十郎が敵城を見やっている。信親も小山に築かれた平山城へ視線を移す。

羽床城は南の本丸を守る二ノ丸と虎口こぐちがあるが、藤目城とさして変わらぬ小城だ。兵力差は十倍以上で、羽床勢に援軍が来る見込みもなかった。だが、たとえ勝ち目がなくとも、戦う将はいた。

「こたびの戦の帰趨きすうは、やはりあの羽床資吉次第だな」

「御意。かの者の金碎棒さえ封じられれば、敵もおとなしくなりましようが」

隼人が自慢の大太刀で激しく渡り合ったものの、金碎棒のせいで大太刀の刃が途中で折れた。隼人が戦場で退いたのは初めてだと、皆が口々に言い合っている。

「俺も、資吉と戦ってみたいものだ」

藤目城の苦戦に学んだ元親は、前線での指揮を御曹司に許していない。信親は本陣で元親のすぐ隣に控えているだけで、資吉はもちろん敵兵に槍を付けていなかった。大暴れする資吉の姿を遠くから眺めているだけだ。

友よ 第4回

「お主の鉄砲は、どうだ？」

彦十郎は小さくかぶりを振った。

「狙ってはおりますが、なかなか」

羽床父子は弓鉄砲を相当警戒していた。将の周りを味方の兵でしっかりと固め、不用意に射程内へ入らない。逆に、入る時はすかさず突撃して、相手の遠距離攻撃を許さなかった。

「もし俺が出れば、勝てると思うか？」

「いかがでしょうな。あの福留殿に勝ったと自慢しておる相手でござるぞ」

「大太刀で隼人に勝てる者はおるまいが、相手の得物えものが金砕棒では、いかにも分が悪い。資吉を倒せるとすれば、俺の槍だけだ」

力攻めをしないなら、戦はこのまま膠着こうちやくを免れまい。

「若様、やはり川におわしましたか」

弥次郎は川の中へ手を突っ込んで、水の匂いを嗅いでいる。

今回は信親隊が編成されなかったため、弥次郎は隼人に頼み込んで福留隊に属していた。すぐそばで、戦のやり方を学んでいるらしい。父の波川清宗はがわきよむねは伊予にあるが、「半人前ゆえ、修行のため」と言い、讃岐の戦線に出ていた。

「弥次郎は教え甲斐があると、隼人が褒めておったぞ」

「あの武人のそばでは、己の手柄は縁遠かるうがな」

彦十郎の毒舌に、弥次郎は魚でも探すように川の中を覗き込みな

友よ 第4回

がら、苦笑した。

「分は弁えており申す。一門衆の面目さえ保てるなら、それ以上は望みませぬ」

麦畑を渡ってくる初夏の風が、三人の髪を撫でている。

「かような緑の川の辺で、黄金色の麦畑を眺めながら、心ゆくまで笛を奏でられたなら、思い残すことはございませぬな」

弥次郎は一門衆の跡取りとして役目を果たそうと懸命に努めていた。が、本心は戦など嫌で堪らぬのだろう。

「俺も鼓を打ちながら、謡いたいものだ」

泉州堺から呼び寄せた鼓の師、勝部勘兵衛は、信親の鼓を土佐一と手放して評してくれたが、戦のせいで長らく謡からも鼓からも離れている。

「長期戦となれば、麦薙ぎは避けられますまい」

彦十郎の懸念する通りだ。羽床父子が降らぬ以上、敵の士気を削ぐために麦薙ぎをして兵糧とするのは、至極当然の戦略だった。

「若様。すべてでなく、せめて一畦ごとに薙ぐのは如何にございませう？」

なるほど、乱世では甘いと一笑に付されかねぬが、弥次郎らしい心遣いだった。城中の者たちだけでなく、山野に隠れて戦の成り行きを見守る民にも、長宗我部の心が伝わるのではないか。

「前代未聞だが、良き思案ではないか。俺から父上に申し上げれば、

友よ 第4回

お聞き届けあるやも知れぬ」

信親が褒めると、弥次郎はいつもの恥ずかしげな笑みを浮かべながら、嬉しそうに頷いた。毒舌が聞こえてこぬから、彦十郎も反対ではないらしい。

「若殿、敵からたくさん矢文が届いておりますぞ」

どこぞから駆けつけてきたへ三蔵は今回、桑名の隊にいたはずだが、信親の居場所を探すのが得意な連中だ。渡された文を開く。

「羽床父子が俺に喧嘩を売ってきおった。本陣へ戻るぞ」

右から覗いてきた彦十郎は軽く舌打ちをしたが、左の弥次郎は青い顔をしていた。

「それがしは福留隊へ戻ります。ちと心配事がございますゆえ」

弥次郎が駆け出すように場を去ると、彦十郎が耳打ちしてきた。

「私にひとつ、策がござる」



二

平山城の羽床城には、へ三階松の旌旗が初夏の風に心地よい音を立てながら、はためていた。

至近に支城もあって、藤目城よりは堅固な造りだが、一万二千の大軍を防ぎ切れる城砦ではない。その城の前に、せいぜい六百ほどの羽床勢が布陣していた。

福留の黒備えは長宗我部軍の最前列で、羽床資吉率いる軍勢と向かい合っている。敵による本陣への突撃を警戒し、軍議の最中も、福

友よ 第4回

留隊が睨みを利かせる役回りを担っていた。

弥次郎の隣に、土佐最強の将が腕組みをして床几しようきに腰かけている。隼人の荒い鼻息が聞こえた。

——荒切りとは、大根でも切っておったんじゃろうのう。

資吉自身は口下手のようだが、足軽に口達者の者がいるらしく、入れ替わり立ち代わりよく通る声で、長宗我部主従の悪口を並べ立ててゆく。そのたび羽床勢はいちいち爆笑した。

——大根は無理じゃ。川好きの御曹司と二人して、水を切ったんじゃろ。伊予では、何にも切れんかったようじゃがの。

「……おのれ、我慢ならん」

戦場を睨みつける隼人が膝の上で拳を震わせていた。

隼人の父福留親政は、自慢の大太刀で敵を斬った逸話でへ福留の荒切り〜と恐れられたが、一昨年の伊予攻めで無念の戦死を遂げていた。羽床兵はこれを嗤わらったのである。

「堪えられませ、隼人様」

元親は家臣団に加わった香川勢の着到を待っていた。同じ讃岐の豪族である香川之景に説かせれば、羽床資載も降るのではと、忠兵衛が見たためである。これ以上両軍が将兵を失えば、深い怨恨が残り、降伏にも支障を来しかねなかった。藤目城の二の舞は避けたい。

——土佐自慢の御曹司は、どこぞへ引っ込んで、姿が見えんのう。情けなや、情けなや。姫若子ひめわこの子も、やはり姫若子であったわ。

友よ 第4回

次は元親父子を嘯うつもりらしい。

弥次郎は憤懣ふんまんやるかたなく、薙刀の柄を握り締めた。信親の悪口だけは聞き捨てならぬ。

——犬の子は、しょせん犬よ。

——それがの。師も猫に鼠ゆえ、犬どころか猫か、鼠あたりに成り下がってしもうたようじゃ。

猫は猫顔の谷忠兵衛を、鼠は桑名を擲揄やゆしている。

「御館様おやかたを犬猫呼ばわりするとは……。挑発と知っておっても、叩き切りとうなる口上ばかり考えおるわ」

——御曹司は色白の美男じゃと言うが、実は女ではないか。本当に男なら、出て参るはずじゃ。

元親はこれ以上の戦をせずに降らせたいと考え、「一切の手出し無用」と厳命していた。そのため、最前線では朝からこの手の悪口を聞かされ通しだった。

「誰ぞ、いま一度本陣へ参って、あやつらを蹴散らしてもよいか、伺って参れ！」

隼人だけでなく、弥次郎もずっと怒りを堪こらえていた。

弥次郎にとって、弥三郎信親は憧れの従兄だった。齡が一つ違うだけなのに、容姿にも才能にも余り差がありすぎて、妬ましいとも思わなかった。

元親は元旦に一門衆を引き連れて石清川いわしがわを渡り、祈念神社きねんに参詣

友よ 第4回

し、土佐統一に加え四国制覇の文を祈請した。信州から諏訪明神すわみょうじんを勧請かんじょうし、武門の神、建御名方神たけみ なかたを祭神として合祀ごうしさせもした。参拝する時、元親のすぐ後ろを歩く弥三郎を遠くから認めて、あれが将来自分の主君になる従兄なのだと思ってくらいだった。

幼い頃、降将の人質で、体も小さく気も弱い弥次郎は、広大な城の内外でよく虐められた。

弥次郎は曲輪くるわの片隅で、独り小さな虫を捕まえたり、竹細工などを作って遊んでいたが、少し目を離れた隙に、飼っていた虫たちは虫籠ごと無惨に殺され、お気に入り竹細工は力任せに引き裂かれていた。それでも弥次郎は、幼な心に自分が人質の身だとわかっていて、事を荒立てまいと抗わなかった。それが良くなかったのだろう、虐めは毎日のようになった。中でも三人組の〈三蔵〉は悪辣あくらつだった。

姉のお福には遊びに行く嘘を吐いていたが、弥次郎は朝が来るたび憂鬱で仕方なかった。

ある夏、三蔵が石清川へ行くというので、弥次郎もしぶしぶ付き合った。最初は皆、勝手に泳いでいたが、やがて三蔵が残酷な遊びを思い付いた。どれだけ相手を川の中に沈めていられるかを競うという。流れの中で弥次郎の頭を押さえ付け、息ができず苦しみがく姿を楽しむわけだ。虐めでは、だいたい一人だけが生贄とされる。無理やり水中へ沈められた弥次郎は、何度も水を飲んだ。必死に顔を上げたところを、次の誰かがまた沈めに来る。

友よ 第4回

武士の子として、どれだけ辛くとも泣きはすまいと齒を食い縛ったが、このまま死ぬのかと水中で思った時、突然、弥次郎の頭を掴んでいた手が離れた。

水の上に顔を出して、鯉のように懸命に息を吸い込んだ時、子供にしては大きな白い裸身が眼前にあった。鍛えられ、引き締まっている。日夜、稽古事ばかりで子供たちの前には余り姿を見せぬが、当時、弥三郎と呼ばれていた信親だった。

——楽しそうな遊びをしておるのう。おれも混ぜてくれぬか。

主家の御曹司に三蔵が作り笑いをした時、弥三郎はやにわにのっぽの十市の髪を掴むや、カズくで勢いよく川の中へ突っ込んだ。続けて、ちびの松崎の髪を左手で引っ掴んで、同じように沈め、足で腹を踏んづけた。目が合うや逃げ出そうとする、でぶの津野の首根っこを掴んで引きずり戻すや、その頭を水中へ叩き入れた。

すべて、あつという間の出来事だった。

——こうやって遊ぶのか。こやつらも楽しませてやらんとな。

弥三郎が白い齒を見せて弥次郎に笑いかけてくる。

五十くらい数えて、水の中で三人が手足をばたつかせても、弥三郎は平気な顔だ。まもなくして、弥三郎は

——おお、うっかり忘れておったぞ。

と、ようやく両手と足を離れた。

溺れかけた三人の荒い息がようやく落ち着いた時、弥三郎は同年

友よ 第4回

代の童たちを見回しながら、頭を下げた。

——すまん。お前たち三人が楽しそうにしておったゆえ、おれもやってみたが、この遊びは、実につまらぬぞ。

弥三郎は水しぶきを上げながら、勢いよく拳を上げた。

——かような遊びより、皆で鰻うなぎを捕まえんか。何匹も獲って、焼いて食おうぞ。

結局捕まえられず、次の稽古事のために弥三郎は去ったが、川から上がり清潔な水色の小袖を着て、大きな傅役もりやくと共に城へ戻ってゆく従兄の後ろ姿を、弥次郎は見えなくなるまで見送っていた。

その日以来、弥次郎への虐めはぴたりと止んだ。三蔵は、弥次郎の竹細工の腕前に嫉妬して虐めに及んだらしいが、逆に教えを乞うようになり、弥三郎の子分ともなったのだった……。

信親は昔も今も、強く、優しい、弥次郎の憧れの従兄だった——。戦場を渡る風に混じって聞こえるのは、終わることのない羽床兵の挑発だ。

——二十二人も師を付けてもろうて、御曹司が学んだのは、逃げ方だけか？

信親に狙いを定めたらしく、言いたい放題、罵ののしっている。

「隼人様。敵は今、油断しておるのではありませんか」

敵が執拗な挑発を続けて二刻近くになるが、長宗我部軍は堪えて微動だにしなかった。

友よ 第4回

今がまさに、資吉を討つ狙い目ではないか。

——福留の大根、もとい水切りからまず学ぶのは、抜き足、差し足、忍び足らしいぞ。

敵陣から聞こえよがしに嘲笑が起こると、弥次郎の心の中で音を立てて何か弾けた。

薙刀の石突でどんと地面を叩きながら立ち上がった。今なら、怒りに任せて、人の命を奪える気がした。

近くに繋いである自分の馬へ向かう。

「おい待て、弥次郎！ 何をするつもりじゃ？」

背後で隼人の太い声が聞こえたが、弥次郎は振り返らなかった。



三

同じ頃、谷忠兵衛は主君のすぐ脇にあって、思案していた。

長宗我部の本陣には、最前線で睨み合う福留隼人を除き、召集に応じた将たちが顔を揃えていたが、信親とその側近である彦十郎は、まだ姿を見せていない。

「笑止。一騎打ちなぞと、いつの世の話をしておるのじゃ」

矢文を手にした元親が嗤いながら吐き捨てた。

降伏勧告に対し、敵将の羽床資載が嫡男資吉と信親の一騎打ちを申し入れてきたのである。

元親自慢の御曹司は、数多付けられた名立たる師の武名こそ、四国にあまねく轟とどろいているが、肝心の信親の武名はついで聞いた憶えが

友よ 第4回

ない。ついては一騎打ちで、わが嫡男にして四国最強の羽床資吉と正々堂々戦えば、多少は名も知られようと、嫌味たっぷりに挑発していた。

一騎打ちの結果、万が一にも信親が勝てば降伏するが、資吉が勝てば長宗我部は兵を引き、向後三年、中讃に兵を入れぬよう約せという虫の良い申し入れだった。敵陣からは何本もの鏑矢かぶりやが射込まれ、本陣に届けられている。

「たかだか羽床のごときが、大長宗我部の御曹司あいまみと相見えるなど、百年早いわ」

元親が笑い飛ばしても、この矢文を知った本人は見過しごせまい。信親の気性は、土佐の深山幽谷しんざんゆうこくから湧き出ずる清流のごとく濁りがなく、研ぎたての刃のように清冽だ。

「敵の矢文が、若の手元に渡らぬよう——」
忠兵衛の言葉を遮るかのように颯爽さつそうと本陣に現れたのは、白銀しろがねの二枚胴の具足を身に着けた若武者だった。信親は初陣で対決した新目弾正に畏敬の念を抱いているらしく、御用商人の穴喰屋ししくいに頼み、よく似た甲冑を特に用意させた。相当に値が張るはずだが、やり手の商人は出世払いで贈ったらしい。

「羽床資吉が一騎打ちを申し込んで参ったとか。長宗我部に対する不届きな挑発、黙ってはおれませう。両軍の兵を死なせず決着を付けるには、あえて受けて立つのが得策と思料いたしまする」

友よ 第4回

信親は上座へ進むと、元親の傍らに用意された床几に腰掛ける。「さすがは信親、見上げた心意気じゃ。されど、遠からず敵は膝を屈する。一騎打ちなど無用」

元親の信親を見る眼差しは、想い人でも見るように優しげだ。この仲睦まじい父子が言い争う姿を、家臣団は誰も見たことがない。

「父上、肝心なのは勝ち方でござる。藤目城の二の舞となれば、四国統一に差し障りましょう」

「案ずるには及ばぬ。余が同じ轍を踏むとでも思うてか」

諭すように穏やかな元親の口調は、一片の苛立ちも含んではない。藤目城攻めの時とは大きく違い、今回はすでに中讃の政略を済ませてあり、讃岐にも長宗我部に味方する土豪がいた。

「されど、当家の名を辱められたままでは、引き下がれませぬ」

「小川を泳ぐ鮎が売って参った喧嘩なんぞ、天翔ける龍が買う必要はないのじゃ」

元親は思いつきの譬えを気に入ったらしく、賛同を求めるように諸将を見、皆が一様に頷くと、嬉しそうな笑みさえ浮かべた。

なお信親が説いても、元親は始終柔らかい口調で応対していたが、最後にひと言付け加えた。

「控えよ、信親」

元親は念押しするように、信親に向かって頷いた。元親はもともと家臣の言に対し真摯に耳を傾ける名君だが、中でも後継者である信

友よ 第4回

親からの進言は、御曹司の顔を立てる意味合いもあって、特別に扱う節があった。家臣たちの言葉を受け、時には素直に誤りを認め、見解を改めもしたが、結論を変えない時は、諭すごとく「控えよ」と短く告げた。

唇を噛んで信親が沈黙した時、末座から進み出て、元親に向かって片膝を突いた者がいる。彦十郎だ。

「御館様。私に妙策がございまする」

元親の「控えよ」の後は意見しない慣わしだが、彦十郎は物事に頓着せぬ男だ。「いつでも武士をやめて神官に戻る」と公言するとおり、地位や身分への未練も、拘泥こうでいもなかった。

「この一騎打ちは、資吉を単騎誘い出す好機。頃合いを見て、私が鉄砲で仕留めます。資吉を失った羽床なぞ恐るるに足らず。そのまま一気に攻め上がれば、波床城を簡単に落とせましょう」

うまく誘い込めば、一領具足の中に紛れて資吉を狙撃できると彦十郎は語った。卑怯なやり口だが、第二の藤目城としないための策だと訴えた。実は忠兵衛も思案した策だが、彦十郎はいかに説く気か。

「いや、信親に危ない橋は渡らせぬ」

「されば、影武者を用いられませ」

落ち着き払った彦十郎の応答に、初めて元親が身を乗り出した。

「福留隊の者にでも、信親の甲冑を着せるわけか」

「御意。羽床資吉の武勇悔りがたく、土佐の将兵を無駄に失うは愚か

友よ 第4回

にございまする」

元親が己の献策を入れねば「愚か」だというわけか。彦十郎はどうにも言葉を選ばぬ癖へきが困る。

「じゃが、影武者を出したとなれば、信親の名に傷が付かぬか」

「そも今の世で一騎打ちなど、申し込むほうが笑い種。味方の勝利のため、あえて己が名を顧みかえりず敵を打ち破ったなら、若殿はむしろ知略に優れた将よと、讃えられましょう」

元親はしばし考えてから、意見を求めるように座を見渡し、最後に忠兵衛を見た。頷き返す。

「よかろう。谷彦十郎の策を用いる。信親よ、福留隊の誰ぞに具足を貸してやれ」



四

彦十郎と急ぎ前線へ出向いた信親は、目を疑った。

単騎、資吉の陣へ向かう馬上の将がいる。紅糸威べにいとおどしの具足に薙刀は、

弥次郎ではないか。

「羽床勢の度重なる挑発に、弥次郎が腹を据えかねたらしく——」

どこからともなく現れた三蔵が口々に説明を始める。

「愚かな真似を！」

信親が齒噛みした刹那、弥次郎が猛然と資吉に襲いかかった。薙刀の長さを生かしている。

意外な善戦に両陣営が湧いたが、弥次郎では勝てまい。

友よ 第4回

「俺がすぐに出る」

「待たれよ、若」

「弥次郎が討たれた後で、命を取り戻せるのか？ 戦っておるのは俺ではない、福留隊の者だ。よいな？」

資吉を鉄砲の射程までおびき寄せはすが、段取りが狂った。

「奴には必ず勝つ。が、万一の時はお主に頼みがある」

信親は近くにいた将に馬を譲らせると、早口で彦十郎に囁いた。

「俺が片鎌槍を天高く掲げた時が合図だ」

「かしこまってござる」

さっそく彦十郎が銃身を立て、火薬を注ぎ込んだ。



五

信親は手綱を握り締め、馬を疾駆させる。師の産方うぶかたきゆうしやう休少に仕込まれた馬術には、自信があった。

行く手では、資吉が金砕棒を振り回しながら、弥次郎との間合いを詰め始めている。

信親が馬腹を蹴った時、前方で鈍い音がした。

弥次郎の薙刀の柄が、途中で折り砕かれている。噂に違たがわぬ怪力だ。棒切れと化した薙刀を捨て、弥次郎が慌てて馬首を返した。追う資

吉が間近に迫り、金砕棒を振り上げる。

「待たんか、資吉。相手を間違えるな」

信親は素早く回り込み、片鎌の穂先を突き入れる。

友よ 第4回

間一髪、振り下ろされた金砕棒の軌道がずれ、弥次郎の馬の尻を傷つけた。驚いた馬が悲鳴を上げて走り去る。

「遠くで控えておれ、弥次郎！」

資吉の進路を遮りながら、信親が馬を入れた。

「ほう。長宗我部にも、多少は戦える者がおるようじゃ」

馬上の敵将は嬉しそうな顔で、信親を見た。隼人を熊とすれば、資吉は猪だろうか。相撲を取らせれば讃岐一強そうな体つきだが、巨体に合う袖と籠手がないのか、胸と腹を守る具足しか付けておらず、よく日焼けした剥き出しの腕の筋肉は、鋼のように硬そうだった。

「命知らずの敵将の名を聞いておこうか」

信親はこれまで嘘を吐いた経験がなかった。両親と二十二人の師から、そう躰けられた。

「長宗我部——信親」

資吉は驚きの顔を見せてから、満面に笑みを浮かべた。

「まさか本当に出てくるとはの」

「この戦の勝敗は見えている。降ってくれぬか」

信親が正視しながら問うと、資吉は真顔になった。

「いや、お主を人質にすれば、負けはせぬ」

資吉が風音を立てて金砕棒を振り上げる。

すでに信親は馬を進めて距離を作り、片鎌槍を構えていた。

雄叫びを上げながら、資吉が飛び込んでくる。

友よ 第4回

すかさず斜め前へ馬を出す。

背後で資吉の打撃が空を切るや、信親は体を捻って槍を繰り出した。

金属音と共に、両手へ衝撃が走る。

瞬時に振り上げられた金砕棒に阻まれたらしい。

何と速い身の返しか。

猛然と資吉が馬を寄せてくると、信親も応じた。唸りを立てて振り下ろされる金砕棒を、今度は真横から片鎌に引っ掛けて逸らす。

そのまま走り抜けると、馬首を返して再び槍を構えた。

資吉の恐るべき怪力を槍の柄で受け止めれば、弥次郎の薙刀のように碎き折られる。あの金砕棒による打撃は、受け止めてはならぬ。

だが、資吉は体勢の立て直しが早く、馬術にも秀でていた。なるほど皆が苦戦するわけだ。

「一騎当千とはよく言ったものだ。資吉よ、俺はお主を家臣に欲しい」

「二十二人の師は無駄でもなかったようじゃな。拙者は強い男を嫌いだではない」

「藤目城に新目弾正という優れた将がいた。が、若くして死を選んだ。お主は、死なせたくない」

「弾正殿は兄貴分だな。幼少より世話になった。されば、仇討ちぞ！」
資吉が勢いよく金砕棒を掲げ、猛然と馬を飛ばしてくる。

「長宗我部の御曹司を叩きのめさん！」

友よ 第4回

これまで資吉は常に左手に手綱を持って馬を御し、右手の金砕棒で攻撃していた。資吉の左側面へ回り込めば、守りにくいはずだ。

信親はすぐさま馬を右へ跳躍させる。

資吉の左半身めがけて槍を突き出した。

が、柄ごしに両手へ強い斬撃を感じた。痺れる手で槍を引く。

「ふん、見事な馬術じゃが、拙者の左に隙があるとでも思ったか」

資吉はとっさに金砕棒を左手へ持ち替えていた。体を鍛え抜けば、左が右に追いついて筋肉は同じくらいに強くなる。本物の武人なら、右とさしたる遜色もなく、左も使えた。

信親は槍を引いて再び馬を離すと、手の感触で柄の具合を確かめた。幸い、ひびなどは入っていない。だが、一撃だけでも、両手が痺れて感覚が戻らなかった。

信親は体格に恵まれ、これまでたゆまぬ鍛錬を重ねてきたが、膂力りよりよぐでは資吉にかなわない。戦い方を変えねばならぬ。幸い馬術なら、信親のほうが上だ。

「弾正殿自慢の片鎌槍を使っておるか。一度では砕けんはずじゃ」

資吉が金砕棒の突起を指先で愛おしそうに撫でている。

「まことに惜しい将であった。この槍も、新目弾正に敬意を表し、あえて使っている」

「お主が口先だけの御曹司でないことはわかった。羽床を降らせたければ、勝つんじゃない！」

友よ 第4回

ブ、ブんと風を作ってから、資吉が右手に持ち替えた金砕棒を天高く掲げた。

「次で終わりじゃ！」

巨漢が突進してくる。信親は敵の馬首に槍を突き入れた。

金砕棒が払おうとするや槍先を引っ込め、空を切らせた。一気に馬を資吉の背後へ進める。

信親は回り灯笼どうろうのようになって、馬で回りながら資吉を攻め、あるいは守り続けた。

打ち合いというより、空振りばかりの変わった戦いの中で、資吉が肩で息をし始めた。重い主を乗せる馬も相当疲れている様子だ。

信親は雄叫びを上げながら、天に向かって片鎌槍を突き上げた。

「そろそろ、けりを付けようぞ」

資吉も応じた。が、金砕棒を構えただけで、振り上げる気はないらしい。できるだけ力を温存するつもりだ。

信親は構わず、一気に馬を進めた。

渾身力で槍を突き入れると、資吉が素早く金砕棒で受け止めた。

鉄と鉄が悲鳴をあげた瞬間、長宗我部の陣で爆音が轟いた。

突然響いた背後の銃声に、資吉が動きを止め、とっさに身を伏せようとした。その瞬間、信親は手首を捻って槍の柄を回転させた。力の限り、手元へ引き寄せる。

資吉の手を離れた金砕棒が、信親の馬の方へ飛んできた。

友よ 第4回

金砕棒の突起に片鎌を引っかけたのである。

信親は槍を宙で半回転させ、石突いしづきで資吉の腹を思い切り突いた。

堪らず落馬した資吉の喉元に向かい、再び回した片鎌の槍先を馬上から突き付ける。

「な、何が起こったんじゃ？」

彦十郎に撃たせたのは、空砲だった。鉄砲で撃たれたところで、この男は降るまい。

「新目弾正の槍のおかげだ」

資吉は銃声で生まれた隙を衝かれた上に、片鎌槍の思わぬ動きに翻弄されたわけだ。重い金砕棒を百回近く渾身の力で振り回せば、必ず疲れが出る。おまけに利き腕でない左腕で持っていた時を狙った。資吉自慢の握力も衰えていたわけだ。

「負けは負けじゃ、殺せ」

資吉は観念した様子で、笑みさえ浮かべている。

「いま一度言う。俺はお主をわが手に加えたい。降れば、長宗我部は必ず羽床の将兵と民を大切にしよう」

「小なりとはいえ、羽床にも意地があるんじゃ。弾正殿と同じよ」

「違う。新目弾正は意地なんぞでなく、故郷の皆を救うために、命を捨てたのだ。お主らは立派に戦った。これ以上続ける意味はないはずだ。城へ戻り、皆と、よう考えてはくれぬか」

信親は穂先を戻すと、啞然とする資吉に向かって頷いてから、長宗

友よ 第4回

我部の陣へ馬首を向けた。



六

長宗我部軍の本陣は、羽床城を望む小高い丘の寺の境内に敷かれた。ここからは攻防戦の様子がよく見える。

羽床勢は善戦していた。未明から実に十三回にわたり長宗我部軍の攻撃を退け続けたが、水の手の曲輪も落とされ、残すは二ノ丸と本丸だけとなった。

忠兵衛は元親の傍らで、麦畑を通ってくる心地よい風を味わっている。ひと畦ごとに刈り取られた畑の風変わりの様子は、城からも見えるはずだった。

「父上。一旦すべての攻撃を止め、将たちを集めては下さいませぬか」

信親の進言に頷くと、元親は片手を上げて近習に合図をした。

すぐに法螺貝ほらがいがあちこちで鳴り響き、戦場に少しばかりの静寂が訪れた。

忠兵衛は元親の隣に端座する若武者を見た。

涼やかな目をした貴公子は、落城寸前の城をじっと見やっていた。まだ二度目の戦場だが、信親は戦の潮目を見極める力を持っているらしい。降伏勧告をするなら、これが最後の機会だ。

信親は羽床資吉との一騎打ちを見事に演じてみせた。これを知った元親は、帰陣した信親を家臣たちの手前、まず叱り付けた。だが本意ではなかったに違いない、結局は手放して大いに讃えた。その後は

友よ 第4回

戦に出さなかったが、当然の報いであつたろう。一万二千の大軍が小さな城へ攻め上がる戦を、信親は黙って眺めているだけだった。

「勝敗は見えてござるが、あの土塁がいささか厄介にございますな」
桑名太郎左衛門が最初に姿を見せた。

持ち場の近い将から、帷幄いあくへ戻ってくる。弓上手が集まる桑名隊は弓兵が中心で、今回の戦場では後方にあつた。

「隼人が派手に暴れて、敵の半分近くは傷付いておりましょう」
信親からの強い進言もあって、敵を傷付けはしても、あたう限り殺さぬよう、土佐兵は命じられていた。彼我の兵力差ゆえにかけられる温情で、降伏もありうべしとの考えから、火もまだ放っていない。若さゆえの甘さはともかく、仁義に厚い信親は、元親とひと味違う名君になりそうだった。

「十二度の攻撃でも落とせぬとは、羽床父子も見上げたものでござるな」

次に現れたのは西讃の降将、香川之景である。

「いやいや、今のが十三度目でござる」

すかさず桑名が訂正すると、香川が「桑名殿には敵いませぬな」と苦笑した。

戦を始める前から両軍の将兵にわかっていた結末だが、まもなく羽床城は落ちる。

将たちが三々五々戻るなか、最後に現れた巨体は、最前線で戦って

友よ 第4回

いた福留隼人である。今回も手勢を率いて城門を破った。

諸将が持ち場の報告を終えると、まとめるように隼人が最後を引き取った。

「羽床資吉も手負いにござれば、次は二ノ丸を落とせましょう。その後、本丸に攻め込む時は、方々、くれぐれも虎口に気を付けられよ」

敵は土塁に兵を集めて懸命に守りを固めていたが、次は突入できるだろう。だが、羽床勢は敵将以下、一丸となっている。藤目城とほぼ同じ戦の流れだった。

羽床資載はこれまで、三度の降伏勧告を峻拒しゅんきょしている。

「父上」と爽やかな声がした。皆の眼差しが一斉に、信親へ注がれた。

「今こそ使者として、同じ讃岐の香川之景殿を遣わされませ。羽床は必ずわが軍に降り、長宗我部は頼もしき味方を得ましょう」

信親の進言に、香川がごくりと生唾を呑む音が聞こえた。

使者とした場合、羽床方はなりふり構わず、讃岐の土豪たちを裏切った香川を斬るか、人質とする恐れもあった。香川は乱世をしたたかに生き抜いてきた海千百千の将だが、豪胆とはいえず、口達者でもない。援軍として加わった際に忠兵衛も裏で打診をしたが、香川に断られ、元親も命じていなかった。

「なぜ、こたびは羽床が降ると言い切れる？」

「川と麦にございまする」

意外な返答を受けて、諸将が揃って怪訝そうな顔つきをした。

友よ 第4回

「民は綾川の恵みを存分に使って、豊かな黄金色の実りを大地から得ております。これは良将、羽床資載がこの地をよく治めてきた証でござる」

口元に頬笑みを浮かべながら、信親は続けた。

「父上がお聞き届け下された、ひと畦おきの麦薙ぎで、羽床の者たちにも長宗我部の心が伝わったはず。さてと、そろそろ頃合いでござろう。されば方々、右手の綾川をご覧下され」

信親が手を示す先、下手に見える異郷の川を、忠兵衛も見やった。場から、どよめきの声上がる。

苔色をしていた川の流れが、血のように赤茶けて染まっていた。皆が驚いて、信親を見ている。

「信親衆は城への討ち入りが許されませぬゆえ、少々細工を施させ申した」

三蔵たちに命じて上流に赤土を運び、川を濁らせているという。綾川をあえて血の川にすることで、これが最後の降伏勧告であると敵将兵に示し、無用の決戦を避けるべしと訴えるわけか。

「私も一騎打ちを通じて、羽床資吉の人物がわかりました。わが大軍を相手に十三度にわたる激闘を戦い抜いた羽床の武名は、もはや隠れなきもの。後は民と将兵の命さえ守られるなら、戦の無益を悟り、安寧を選びましょう」

信親は元親に会釈してから、新しい義理の叔父のほうを見やった。

友よ 第4回

「香川殿。対面の際、羽床父子には、かくお伝えあれ」

信親は白い歯を見せて、爽やかに言い放った。

「民はもちろん、羽床一族並びに城内の将兵、すべての命を必ず助ける。この、長宗我部信親が請け合う、と」

元親が信親の面目を潰すことはあり得ぬ。長宗我部ではこれほど確かな約束もないわけだ。

座にしばしの沈黙が流れた後、元親は信親にゆっくりと頷き返した。



七

はたして半刻の後、羽床資載は香川之景の説得を受け入れ、降った。交渉の際には、かねて対長宗我部の最強硬派だった嫡男の資吉が、降伏を受諾するよう強く勧めたという。資吉を人質として岡豊城へ差し出す条件で、全員の助命はもちろん、所領もこれまで通り安堵された。

明け渡された羽床城本丸からは、傷付いた讃岐兵を手当てしてやる土佐兵の姿が見えた。戦が終わった後の限りない安堵と、慈しむような穏やかさがあちこちにあった。

戦に巖然たる勝敗があり、恨みは残り燻ろうとも、今や味方となったのだ。それぞれの気魄と力がぶつかり合った激闘の後には、互いを認め、称え合う絆が自然と育まれるらしい。両軍将兵の間に生まれた^{いた}労わり合いが、和氣藹々^{わきあいあい}とささえ言える空気を醸し出していた。

友よ 第4回

忠兵衛の隣で、制圧した中讃の山間の地を元親が眺めている。

戦の後とは思えぬ穏やかな顔つきだった。

「御館様、かような戦は、初めてではありませぬか」

戦なのに、高揚よりも、幸福に近い感覚を皆で分かち合っている気がした。

ひと畦ごとに刈られた麦畑が、ずっと向こうの山際まで広がっている。忠兵衛はかくも奇妙な麦畑を初めて見た。赤く濁っていた綾川はすでに常の色を取り戻している。

勝利したとはいえ撤退を強いられた、あの凄惨極まりない藤目城攻めとは、まるで違う。羽床城の攻略に成功したのは、信親の力だ。

初陣の悲劇が信親を大きく育てたとも言えた。信親の元服と登場により、長宗我部も明らかに変わりつつあった。

「若木が、大樹に育とうとしておる」

同じことを考えていたのか、元親が満足そうに目を細めながら、麦畑を見下ろしていた。

——資吉、怪我のほうは大事ないか。

朗らかな声は、信親だ。二ノ丸に繋がる虎口では、羽床資吉が腕の傷の手当てを受けており、その周りに長宗我部の若い将たちがたむろしていた。信親衆も、家臣団もますます賑やかになりそうだ。

「戦いの中で心を通わせるとは、不思議な力でございまするな」

信親が資吉の人物を見抜いただけではない。資吉が信親の人物を

友よ 第4回

知り、信ずるに足ると考えたからこそ、羽床は土壇場で降伏勧告に応じたのだ。

「次は重清城と、岩倉城か」

いずれも三好方の重要拠点だが、今の長宗我部の敵ではあるまい。元親が手塩にかけて育ててきた後継者は、家臣団の期待に背かなかった。いやそれどころか、わが子彦十郎ともども、それぞれの父を超える英傑になるかも知れぬとさえ、忠兵衛には思えた。



八

戦の終わった羽床城の本丸に、柔らかな陽光が射している。

「ともかく息災のようで何よりだ、資吉」

信親は本丸の外壁にもたれて手当てを受ける巨漢に笑いかけた。

「あいや、若。ご覧の通り、福留の黒備えのおかげで、拙者は全身くまなく怪我だらけでござるぞ」

「何のそれしき、唾を塗っておけば、明日には治っておるわ。のう、彦十郎？」

背後から聞こえてきた銅鑼声は、隼人である。

「確かにこの男なら、放っておいても心配なさそうでござる」

彦十郎が毒舌で応じている。

「資吉、お前が折ったわしの大太刀を弁償せんか。さもなければ、このまま縊り殺すぞ」

隼人が親しげに資吉の猪首に太い腕を回しながら、おどけている。

友よ 第4回

「なんと無体な物言いじゃ。若、助けてください」

「おお、化け物はこんな所におったのか。身どもの矢を食らいながら、まだ生きておるとは」

桑名まで輪に加わってきた。

「しつこく射かけてきおった弓手でござるな。卑怯な飛び道具を使う御仁じゃ」

「卑怯とは何じゃ！ 小笠原流の弓術には、四百年の歴史があるんじゃないぞ」

桑名が血相を変えて、尖った鼠顔を資吉に突き出している。

「ふん、金砕棒のほうはずっと古うござるわ。何しろ鬼が使っておったくらいじゃからな」

少々剣呑な空気けんのおんに、信親が割って入った。

「今日より、羽床資吉が信親衆に加わった。皆、仲良うしてくれ」

「若殿のご命とあらば、致し方ござらん。わが軍におれば、小笠原流が天下一の弓術であると、この者にもじきにわかりましよう」

「気が向いたら、桑名から学ぶが良い。少々口うるさい男だがな」

「少々ではなさそうですがなあ」

資吉が困ったような顔で桑名を見ている。

「若、まさか、この者を出丸に住ませるなどと、仰せにはなりませんまいな」

彦十郎が尋ねてくると、信親は笑顔で応じた。

友よ 第4回

「部屋はまだあるゆえ、同じ屋根の下に住む。不服か？」

「この者、軒がうるさいように見受けられます」

「ああ、拙者は軒も四国一じゃとか。自分ではわかりませんがな」
資吉が胸を張っている。

「案ずるな、彦十郎。資吉には玄関近くの部屋を使わせる。共に住もうぞ、資吉」

信親が資吉の肩を叩くと、悲鳴が上がった。

「あいたた、痛うございませぬ、若！」

「おお、すまぬ。肩まで怪我をしておったのか」

「じゃから、拙者は全身くまなく怪我をしており申す」

どっと若い将たちの笑いが起こった。うまくやって行けそうだ。

信親は賑やかな輪から出ると、二ノ丸を下り、本陣の敷かれていた寺へ向かった。

誰もいない明王殿の軒下で、一人の若者が皆に忘れられたように端座たんざしている。命令に反して資吉の挑発に応じた咎で、弥次郎は戦が終わるまで謹慎を命ぜられていた。

「弥次郎、息災か？ 父上からは結局、何のお咎めもなしとのことだ」

「若様。勝手をして、すみませぬ」

信親を貶められて、弥次郎にはどうしても許せなかったのだ。ゆえに強敵を相手に、戦いを挑んでくれた。弥次郎の抜け駆けの理由を知った元親は、軍令違反を不問とした。

友よ 第4回

「俺からは礼を言うぞ、弥次郎。だが、悪口なんぞ幾ら言われても、痛くも痒くもない。お前を失うほうが、俺にとってははるかに辛い」
言い聞かせるように肩に手を置くと、弥次郎が感極まった様子で、涙を浮かべている。

「もっと、強うなりまする」

「まだまだ俺も、お前も強くなれる。互いに守り合おうぞ。さてと、皆がお前を待っておる。新しき友と引き合わせてやろう」

手を差し伸べて弥次郎を立ち上がらせた時、二人の背後で悲鳴が上がった。

振り返ると、濃鼠こいねずの入江左門がいた。血で汚れた脇差を手に立ち上がるところだった。足元には羽床勢の足軽が一人、首筋を切られて仰向けに倒れている。

「やめんか！ 羽床はもう、降ったのだぞ！」

最後の最後は降ったとはいえ、激戦の中で大切な人間を土佐兵に殺された者もいる。両家が和睦したからと言って、直ちに恨みが完全に消え去るはずもなかったろう。

入江はかすかに会釈すると、信親に背を向け、立ち去ろうとした。

羽床城攻めでも、ずっとどこかで信親を見ていたのだろう。

「待て！ 何度も言ったはずだ。お前は人を殺しすぎる」

入江が足を止めて振り返った。目深な頬かむりのせいで、視線もよく見えない。

友よ 第4回

倒れた足輕に弥次郎が駆け寄っている。懐手なつかしのまま、すでに事切れている様子だった。

弥次郎が懐から抜き出した足輕の手には、小さな木彫りの不動明王像があった。戦で死ななかった礼に参拝しようとしたのか。信親を襲うつもりなどなかったのだらう。誤殺だ。

「降れば、皆の命を助けると約したに……すまぬ、俺のせいだ」

信親は死んだ足輕を抱き起こして、何度も詫びた。

やがて信親は、離れて立ち尽くす小柄な忍びを睨みつけた。

「殺さずとも、よいではないか」

涙が止まらなかった。

信親はぼろぼろ涙を流しながら、嘆き、怒り、諭した。

ただ、雨に打たれ続けるかのように、入江は黙って聞いていた。まるで獣に語り掛けているようだった。

「入江左門よ。俺の生死は、天が決める。父上に申し上げるゆえ、もう俺を守らずともよい。されば二度と、わが前に姿を見せるな」

骸むしらを横たえた時、弥次郎が慰めるように、そっと信親の前腕に手を置いた。

(つづく)